

小野妹子・犬上御田鍬とそのふるさと

大橋 信弥

はじめに

こんにちは。ご紹介いただきました大橋でございます。

私は滋賀県に住んでおりまして、近江の古代豪族とか渡来人について、少々勉強をしております。公開講座の主旨からすれば、留学生を出した渡来氏族についてお話した方が良かったかもしれませんが、本日は第1回目（2回目？）の遣隋使と第1回目の遣唐使として派遣された、小野妹子と犬上御田鍬が、ともに近江の有力な古代豪族であったのは、いったい何故なのか。またそ

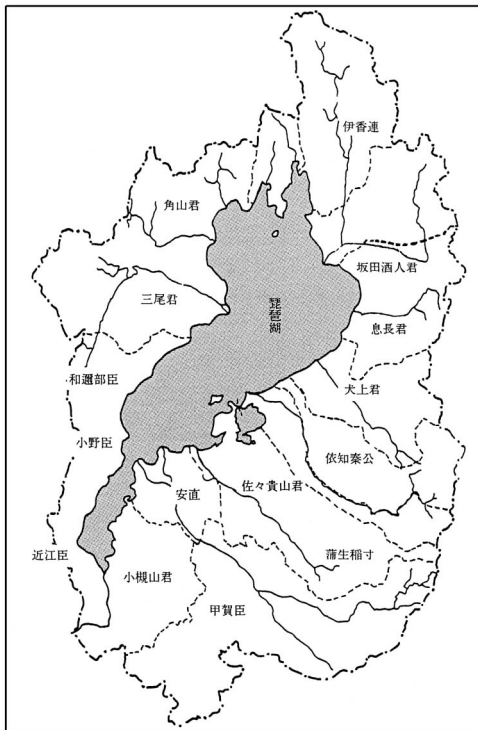


図1 近江古代豪族の分布



図2 近江の渡来系氏族の分布

れは近江という地域とどのような関わりがあるのか。その辺のことについて、お話をさせていただきたいと思います。

まず、少なからずローカルな話になりますので、近江という所について知っていただくために、少し近江、滋賀県がどのような歴史的環境にあったかということをお話しておきたいと思います。図1は近江の古代豪族の分布を示しております。琵琶湖が真ん中にございまして、一部琵琶湖に面していないものもありますが、その廻りに12の郡がございます。だいたい近江の場合は、川とか山とかを境界として、小さな歴史的世界を形成しております。そして、出雲とか吉備では、出雲氏とか吉備氏のように、有力な豪族が、律令時代の国単位やそれを超える地域で、抜きでた地位を持つ場合があるのですが、近江の場合は近江全体をおさえるような抜きでた豪族はおりません。それぞれ、後の郡を単位として、一、二の有力な豪族が勢力をもっておりまして。そして、同様に主要な古墳群・古墳をドットしていきますと、これも有力な豪族に対応するかのよう、後の郡ごとに、一ないし二の首長墓群、有力豪族を葬った古墳がまとまって所在しております。本日のお話に関わりますのは、この図の琵琶湖の東、やや上に、犬上君が見えます。犬上郡のところです。それから、琵琶湖の西の真ん中あたりに、小野臣というのがあります。滋賀郡の北部になります。ちょうど琵琶湖の東西に、それぞれ本拠を置く豪族と言えるでしょう。

図2は、今日のお話とは直接関わらないのですが、古代近江の特徴を示す渡来氏族の分布を示したものです。平安時代に撰録された『新撰姓氏録』には、ご存じのように当時の畿内に居住し、朝廷で一定の地位を築いていた氏族の出自が網羅されていますが、その中の30%が、自らその出自を中国や朝鮮半島に求めています。近江の場合も、9世紀以前の文献や木簡に見える古代人名を集成しますと、約30%が渡来系の氏族になります。それを郡単位で表示したものがこの図です。小野臣氏の本拠がある滋賀郡には、その南部（大津北郊）に多くの渡来系の氏族が居住しております。特に漢人村主といいまして、倭漢氏という渡来系の有力な氏族の配下の人々が多く住んでおります。

琵琶湖の東の犬上郡は南に隣接するのが愛智郡です。愛智郡では依知秦公氏という秦系の渡来氏族がこの郡の一番有力な氏族でして、しかも住民の7割近くが秦氏系の氏族で占められているという、近江の中でも特別な地域です。そして実は犬上郡も、愛智郡とよく似た地形環境でありまして、渡来系氏族の居住が著しい地域なのです。この地域の最有力の豪族である犬上君氏も、こうした地域の特徴を少なからず体現しているように思われます。

ところで、図1をもう一度見ていただきますと、近江の古代豪族の特徴を端的に示しているのが、多くの豪族が、「君」という姓を持っていることです。「君」は一般的には、天皇の一族から分かれたと主張している豪族とされていますが、事実というわけではなく、天皇と特につながりの強い豪族ではないかとされています。実際、渡来系である依知秦公までが「公」という姓を持っているのは、そうした特質を示していると思います。

それに関連することですが、もう一つ、近江の古代豪族で忘れてはいけないのが、古墳のことです。本日は古墳のことは、時間の関係もあって資料を挙げておりませんが、近江にも4世紀から7世紀まで多くの古墳が造られていますが、その古墳の中で一番大きいのが、私が現在勤めております安土にある瓢箪山古墳で、全長162mの前方後円墳がございます。これを含めて、県内

には100mを超える古墳は、今のところ3基のみで、大半が50m前後です。しかも正規の前方後円墳は少なく、帆立貝式古墳や大型の方墳や円墳が有力豪族の墓となっており、中央政府の何らかの規制があったとする見方も出されています。

近江は皆さんご存知のように、いわゆる畿内の国ではございません。東山道のいちばん最初の国ということで、畿外の国ですが、実は『古事記』、『日本書紀』をはじめとする古代の文献を見ていきますと、近江の古代豪族に関わる記述が多く出てまいります。というのは、渡来氏族も含めまして、近江の古代豪族たちは、大和政権の本拠である大和に何らかの形で出仕し、大王に仕えていたからであると考えられます。ただ、今日お話しする犬上氏と小野氏については、そうした記録が少なく、これまで少しずつ取り組んできた近江の他の古代豪族と同じように検討する手掛かりがつかめませんでした。ようやく最近になって、何とかその一部だけでも、実像に迫る見通しが、たってきたかなと思っております。

先程の近江の古代豪族分布図の根拠となっておりますのが、図3で、近江の律令時代の郡司を集成した表です。ご承知のように郡司クラスの豪族の記録は、中央の史書に残るのは稀でして、この表も偏ったあり方を示しております。愛智郡の記録が多いのは、東寺に残されていた土地の売券が多くあるからでして、ほとんどを依知秦氏が占めています。これとは逆に滋賀郡の場合は郡司の資料はありません。小野氏についてはこの表からは確認できません。実は犬上郡についても、記録が少なく、かろうじて平安時代の記録ですが、犬上春吉という人が前犬上郡大領として出て参ります。ただこの記録により、犬上氏が犬上郡の古代豪族で、郡領氏族であったことが確かめられます。

1 小野妹子とその一族

さて前置きはこれくらいにして、まず小野臣氏、小野妹子について見ていくことにしたいと思います。遣隋使に関する中国の史書の記事ですが、時間もございませんので、これについては、簡単に見ておくことにしたいと思います。最初の『通典』開皇二十年（600）の記事は、第1回遣隋使の記録ですが、これはご存知の通り、日本側の記録がないもので、『隋書』倭国伝にも第1回の遣隋使の記録がございます。内容には詳しく触れませんが、これらの記録で注意と申しますか、少し確認しておきたいのは、この600年がどういう時期であったのかということです。ちょうどこのころ、朝鮮半島では百済と新羅が激しく対立しておりまして、倭国は百済の要請もあって、新羅に出兵するというような状況がありました。実際600年には新羅へ出兵をしておりまして、翌々年の602年・603年にも計画は建てておりました。ですから、そうした東アジア世界の中で、倭国が朝鮮半島へ介入するというような事態が生起していたこと、それと連動するかたちで、第1回の遣隋使が派遣されている可能性も、いちおう押さえておきたいと思えます⁽¹⁾。

郡名	年・月・日	大領(擬任も含む)	少領(同上)	主政(同上)	主帳(同上)	采女・郡老
滋賀	天平 八・七・元					志我采女槻本連若子
栗太	〃 八・七・元				川直百嶋	栗太采女小槻山君広虫
甲賀	天平勝宝三・七・元	甲可臣乙磨	甲賀臣男			
野洲	天平 一六・八・五	佐々貴山君親人				蒲生采女佐佐貴山公賀比
蒲生	延暦 四・正・元	佐々貴山公由氣比				
	〃 六・四・四	佐々貴山公是野				
	元慶 元・三・二	佐々貴山公是野				
	承平二・正・三以前	大友馬飼				
神崎	天平 六・八・五	佐々貴山君足人				
愛智	天平宝字六・四・三	依知秦公門守	秦大藏忌寸広男		服部直綱公	
	〃 七・六・三	依知秦公	依知秦公		野中史	
	延暦 五・九・三	依知秦公足上	依知秦公豊上		野中史	
	〃 五・二・二	依知秦公足上	依知秦公足上		平群	
	〃 三・正・三	依知秦公足上	依知秦公		倭清公	
	弘仁 二・三・二	依知秦公	蚊野公乙足		平群氏吉	
	〃 九・三・三	依知秦公			日佐首勝繼	
	天長 二・二・五	依知秦公吉繼	依知秦公吉繼		平群益長	
	〃 二・二・三	依知秦公名守	依知秦公		服直	
	承和 七・二・元	依知秦公福成	依知秦公内守		依知秦公	
愛智	〃 四・九・三	依知秦氏吉			平群広人	
	嘉祥 元・三・七	依知秦公	依知秦公当男		掃守連	
	仁寿 四・二・三	依知秦公成益	調忌寸		掃守連田次鷹	
	〃 四・三・二	依知秦公氏益	調忌寸		依知秦公	
	齊衡 二・九・三	依知秦公	依知秦公			
	天安 元・三・八	依知秦公成益	依知秦公福行		依知秦公	
	貞観 七・二・五	依知秦公市原	依知秦公真人			
	〃 八・二・二	依知秦公勇吉				
	延喜 二・二・七	依知秦文雄				
	〃 三・二・三	依知秦	依知秦			
大上	元・七・元	大上春吉		調	秦	依知秦(郡老)
坂田	天平 元・三・三	坂田酒人真人新良貴	中臣嶋足		穴太村主麻呂	神人氏岳(郡老)
	天平宝字六・八・六	息長真人	坂田酒人真人	文忌寸	鳥次惟成	
	弘仁 四・三・九	穴太村主	比瑠臣	湯坐連		
	天長 一〇・二・三	息長真人	坂田酒人真人	志賀忌寸		
	承和 三・三・二	穴太村主	息長真人	志賀忌寸		
	〃 六・三・三	穴太村主	比瑠臣	春日臣		
		息長真人福鷹	坂田酒人真人	志賀在守		
伊香			比瑠臣	春日臣		
高島	天平宝字八・九・		角家足			

図3 近江国郡司一覧(八・九世紀) (『八日市市史』第1巻 古代より)

〈8〉小野妹子・大上御田継とそのふるさと(大橋)

〈史料Ⅰ〉

『通典』卷一八五 边防一 倭 開皇二十年（六〇〇）条

隨の文帝の開皇二十年、倭王姓は阿每、名自〔目〕は多利思比孤、その国には阿輩雞彌と号し、華言の天児なるが、使を遣わして闕に詣でる。その書にいわく、「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す、恙なきや、云々」と。帝、これを覽て悦ばず、鴻臚卿にいいわく、「蠻夷の書札なきものあらば、復た以て聞するなかれ」と。

『隋書』卷八一 東夷伝・倭国（『隋書』倭国伝）大業三年（六〇七）－四年条

大業三年、その王多利思比孤、使を遣わして朝貢す。使者いわく、「聞く、海西の菩薩天子、重ねて仏法を興すと。故に遣わして朝拜せしめ、兼ねて沙門数十人、来って仏法を学ぶ」と。その國書にいわく、「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す、恙なきや、云云」と。帝、これを覽て悦ばず、鴻臚卿にいいわく、「蠻夷の書、無札なる者あり、復た以て聞するなかれ」と。

『日本書紀』卷第二 推古天皇十五年（六〇七）七月三日条

秋七月の戊申の朔庚戌に、大礼小野臣妹子を大唐に遣す。鞍作福利を以て通事とす。

『日本書紀』卷第二 推古天皇十六年（六〇八）四月条

十六年の夏四月に、小野臣妹子、大唐より至る。大唐、妹子臣を号けて蘇因高と曰ふ。即ち大唐の使人裴世清・下客十二人、妹子臣に従ひて、筑紫に至る。難波吉士雄成を遣して、大唐の客裴世清等を召す。唐の客の為に、更新しき館を難波の高麗館の上に造る。

『日本書紀』推古天皇十六年（六〇八）九月五日条・十一日条

九月の辛未の朔乙亥に、客等を難波の大郡に饗たまふ。辛巳に、唐の客裴世清、罷り帰りぬ。則ち復小野妹子臣を以て大使とす。吉士雄成をもて小使とす。福利を通事とす。唐の客に副へて遣す。爰に天皇、唐の帝を聘ふ。其の辞に曰はく、「東の天皇、敬みて西の皇帝に白す。使人鴻臚寺の掌客裴世清等至りて、久しき憶、方に解けぬ。季秋、薄に冷し。尊、何如に。想ふに清念にか。此は即ち常の如し。今大礼蘇因高・大礼乎那利等を遣して往でしむ。謹みて白す。具ならず」といふ。是の時に、唐の国に遣す学生倭漢直福因・奈羅訳語恵明・高向漢人玄理・新漢人大圀、学問僧新漢人日文・南淵漢人請安・志賀漢人慧隱・新漢人広濟等、并て八人なり。

『続日本後紀』卷第三 承和元年（八三四）二月二十日条

小野氏の神社は近江國滋賀郡に在り。勅して、彼の氏の五位已上は、春・秋の祭りに至らん毎に、官符を待たずして、永く以て往還することを聽す。

『続日本後紀』巻第六 承和四年（八三七）二月十日条

勅して、大春日・布瑠・粟田の三氏の五位已上は、小野氏に准じ、春・秋二祠の時に、官符を待たずして、近江國滋賀郡に在る氏の神社に向うことを聽す。

次に『隋書』倭国伝など、小野妹子に関わる中国側の記録です。まず607年、推古十五年の小野妹子が大使として派遣された記事で、有名な「日出づる処の天子云々」の国書がみえるものです。そしてその後、翌年に裴世清という隋の官人が倭国に派遣され、それと共に小野妹子も戻ってくるというような記述がございます。そのあたりは、省略しまして、倭国側の史料に移ることにいたします。

倭国の記録は、『日本書紀』に一連の記事があります。まず607年、推古十五年の日本側では最初の遣隋使の記録で、小野妹子を唐国に遣わすと書いてありますが、これは隋のことです。ここでは小野妹子の冠位を大礼としておりますが、いわゆる冠位十二階の中で五番目ということで、それ程高くない位階になっております。ところが後に、小野妹子はおそらく遣隋使の功績によって、大徳という冠位十二階の中で一番高い位階を得ておりますから、帰国後の妹子の動向は、ほとんど記録に出てきませんが、功績を評価されて朝廷で高い地位を得ていたことが確認できるわけです。

次は推古十六年、妹子が帰国した記事です。ここで問題になるのは、妹子が帰国の途次、国書を奪われたという、いわゆる国書紛失事件です⁽²⁾。これは朝廷で大きな問題になったようですが、結果的には罪は問われることなく、許されたと書いてあります。ですからこの事件については、多くの議論がなされておりますが、本日はそれについて深入りは避け、そういうトラブルがあったにせよ、小野妹子の功績は大きく評価されていたことは間違いのないと言えると思います。

そして次は、同じ推古十六年の記事で、隋の使節裴世清が帰国する時、再び小野妹子を大使として送った記事です。この記事で、特にふれておきたいのは、本日のテーマとも関わりますが、この時妹子に同行して、多くの留学僧が派遣された記事があります。倭漢直福因以下の名前が出てきますが、その多くが漢人と呼ばれており、倭漢氏の所謂配下の漢人村主の一族とみられています。漢人村主は、詳しく紹介する余裕はありませんが、五世紀後半以降、新たに朝鮮半島から渡ってきて、倭漢氏の配下となり、朝廷のいろいろな部署に登用・配属された渡来系の人と考えられます⁽³⁾。おそらくこれが記録にみえる最初の留学僧になると思うのですけれども、その多くがこうした渡来系の人であったということは、やはりこの時代の特徴として確認しておく必要があるかと思います。

特に、この留学僧の中に、志賀漢人慧隱が見えますが、志賀漢人というのは、文字通り志賀すなわち近江の志賀の地に居住する漢人ということでしょう。この記事は、すでに近江に本拠を置く渡来人が、留学僧を出すほど力を持つようになっていたことを示すものと言えます。先ほど見ました図2によりますと、琵琶湖の南、滋賀郡に多くの漢人村主が居住することが確認できます。それらは、「大友漢人」とか、「大友村主」、「大友日佐」、「大友但波史」の大友村主グループ、それから「穴太村主」などのグループ、「錦部村主」などのグループがありまして、他に「登美史」とか伝教大師最澄を出した「三津首」なども、そこに出てまいります。これら滋賀郡に住み着い

た漢人たちは、当初は一括して、志賀漢人と呼ばれていたと思われますが、その後大友とか、穴太とか、現在の天津の北の方に残っております地名、居住地により、いくつかのグループに区別されるようになったと考えております⁽⁴⁾。

こうした渡来系の人々の大量居住を示すのが、天津北郊で発見された特異な古墳群です。狭い山麓に本来は1000基余り（現在確認できるのは600基ほど）、6・7世紀の古墳が造られていたとみられ、そのかなりの部分が、所謂天井部をドーム型にし、平面形も一般の古墳が長方形であるのに対し、四角い、正方形に近い石室をもつものであること、所謂副葬品にも、一般の古墳と異なりミニチュアの竈セットや、銀とか銅で作られたかんざし（釵子）を入れるなど、在来の古墳では出土しないものを含んでいます。

山手にそうした古墳がありまして、平地の方には、古墳に並行する時期の多くのムラの跡が出て参ります。その中にいわゆる大壁建物といわれる、壁造りの土蔵のような建物とか、朝鮮半島の床暖房の施設であるオンドルの跡が見つかっています。冬の寒さが日本列島とはけた違いに厳しい、朝鮮半島北部の自然環境と関わりとみられています。そこで滋賀郡の古代の住民を集成しますと、そのほとんどが渡来系と考えられています。大雑把に言いまして、滋賀郡の北部、琵琶湖が一番狭くなっている現在の堅田を中心とする地域には、小野臣とか和邇部臣など、在来の有力な豪族分布しておりまして、南部には渡来系の人たちが、かなりまとまって居住しているというのが、この地域の状況であると言えます。したがって、北部の小野氏と南部の渡来系の人たちとの交流も、かなりあったと想定しております。

ただそうかと言って、何故小野妹子が遣隋使に選ばれることになったのかという点は、もう少し説明が必要でしょう。このことについては、やはり最初にお話しました近江の豪族の一般的な性格に関わりと考えております。私は史料に見えませんが、近江の豪族たちは、早くから大和政権の中樞に登用され、政治・軍事など各方面で活躍していたと考えております。対外交渉に限りましても、例えば、継体天皇の末年、近江臣毛野が、新羅を討つべく五万の大軍を率いて派遣されますが、ご存知のように北部九州の豪族筑紫君磐井の反乱で足留めになっております。近江の古代豪族が内政だけではなく、外交・軍事を含めて、対外交渉で重要な役割を担っていたことを窺わせます。そこで小野氏について見ていきたいと思います。

小野氏がどういった豪族であったのかを見る上で、まずその豪族の系譜ですね、出自を示す系譜が問題となります。『古事記』孝昭天皇段の記事ですが、孝昭天皇が尾張連の祖、奥津余曾の妹である余曾多本比売命と結婚して生まれたのが天押帶日子命とあります。この天押帶日子命が、「春日臣・大宅臣・栗田臣・小野臣・柿本臣・壺比臣・大坂臣・阿那臣・多紀臣・羽栗臣・知多臣・牟耶臣・都怒山臣（君）・伊勢飯高君・壺師君・近淡海国造」の十六氏の祖とされており、「ワニ氏同祖系譜」と呼ばれています。最初にみえる春日臣が、もともとワニ氏を称していたとみられています。このワニ氏については、かつてはほとんど注目されていなかったのですが、ご存知の岸俊男先生の研究によりその重要性が明らかになりました。天皇の後妃についての、『古事記』『日本書紀』の記載を検討され岸先生は、4世紀代には葛城氏が、6世紀代には蘇我氏が多くの后妃を出し、外戚として活躍するのに対し、5世紀代から6世紀にかけて、ワニ氏が多くの后妃を出し、その生まれた皇女がまた后妃になるという、姻戚関係の重複があるとし、表だっ

てはそれほど政治的な動きは見えないけれども、大和政権内部で、隠然とした勢力を持っていたのではないかと考えられました⁽⁵⁾。

このワニ氏同祖系譜で、さらに注目していただきたいのは、この同族の中に、小野氏以外にも、近江に関わる豪族が見えることです。系譜の下から三つ目のところに「都怒山臣（君）」が見えます。これは別の史料では角山臣（君）とも表記されますが、滋賀郡のさらに北、高島郡北部の角河（石田川）流域を本拠地とする豪族です。またこの系譜の最後のところに「近淡海国造」が見えます。近淡海国造の本姓については、これまで議論のあるところですが、私はこれを小野氏と同じく、滋賀郡北部に本拠を持つ和邇部臣のことではないかと思っております。このように、ワニ氏同祖系譜の中に、湖西北部に本拠を置く豪族が3氏もあるということは、ワニ氏と琵琶湖の西、湖西との関わりを示しております。岸俊男先生も、ワニ部の分布などから、ワニ氏は山城の北部から近江の湖西を通して、若狭、越前の方に勢力を伸ばしているとされておられます。そして岸先生は、ワニ氏は早い段階から、大和政権による国内の統一に関わった豪族ではないかとも言われております。そうした中で、近江湖西北部の3氏が同族とされていることは重要であると思います。

このように小野氏は、史料上は突然遣隋使として対外交渉に登場するように見えますが、その背景として、同族のワニ氏の一員として、軍事的な面で大和政権の一翼を担っていたこと、そうした延長上に外交への関与も想定されるのではないのでしょうか。奈良時代以降、対外使だけでなく、小野氏の一族から陸奥守や出羽守に任じられるものが目立つのも、それを裏付けるのではないのでしょうか。

さて小野臣氏については、近江の滋賀郡北部の豪族として説明してきましたが、実は山城北部に本拠があったとされる方も少なくないのです。その根拠のひとつが、小野毛人の墓誌です。現在京都国立博物館に所蔵されており、いつも常設展で展示してありますが、墓誌に天武朝の太政官兼刑部大卿とある毛人の墓は、近江でなくて京都市左京区の高野、古代の小野郷の地で発見されたのです。この地は、先に私が小野臣の本拠地としました滋賀郡北部の小野とは、途中越、竜華越ともいいますが、これを挟んで、隣接しております。私は近江に本拠があったと考えておりますが、山城の小野の地も忘れてはならないと思います⁽⁶⁾。

小野氏の本拠を近江とする大きな根拠となりますのが、『新撰姓氏録』左京皇別下の小野朝臣の記事です。「大徳小野妹子、近江国滋賀郡、小野村に家れり。因りて以て氏と為す」とあり、小野妹子が滋賀郡の小野村に住んでいたということが、明快に書かれております。これについても議論があるのですが、これはその通りに受け取るべきだと思います。ところで先の小野郷については、『類聚三代格』に収載される弘仁四年（813）十月二十八日付の猿女に関わる太政官符があります。この中で小野朝臣野主が主張しているのは、猿女の養田が近江国の和邇村と山城国の小野郷にあって、それを和邇部臣と小野臣とも、本来猿女を出す家ではないのに管理しており、猿女を貢進しているのはおかしいということです。ここから判ることは、山城の小野郷と近江の和邇村が一体の関係にあったこと、小野臣と和邇部臣が近い関係にあったことを伺わせることです。そして和邇村は近江の小野村に隣接しておりまして、竜華越えを挟んで所在する両地域の一体性を示すものと言えます。

そして小野氏の本拠を近江と見るもう一つの根拠が、『続日本後紀』承和元年（834）二月二十日条の記事です。「この氏の神社は近江国滋賀郡に在り」とし、「勅して彼の氏の五位已上は春・秋の祭り至らん毎に、官符を待たずして、永く以て往還することを聴す」とあります。本来畿外の地にある近江に行くには、官符で許可を得る必要があるのですが、小野氏に限って、許可無く行く事を許すとあり、ここで小野氏が祀っていた神社（氏神）は近江国滋賀郡にあるということが明快に書かれております。また『続日本後紀』の承和四年（837）二月十日条には、「勅して、大春日・布瑠・粟田の三氏の五位已上は、小野氏に準じ、春・秋二祠の時に、官符を待たずして、近江国滋賀郡に在る氏の神社に向うことを聴す」とありまして、これより前からと思われますが、ワニ氏同族の中で、春日氏の力が後退しまして、おそらく小野妹子以降だと思いますが、小野氏が代わって「氏上」的な地位についていたことが窺えます。小野氏の神社に、ワニ氏の同族がお参りをするのは、そうした背景があったと思われます。また『延喜式』の所謂式内社の記事を見ますと、近江国滋賀郡の8座の中に、小野神社2座とあって、大社、名神大とあります。いっぽう山城国愛宕郡の21座の中に、小野神社が2座ありますが、いずれも小社とみられます。このこ

とも小野臣の本拠が、滋賀郡にあったことを示しているのではないのでしょうか⁽⁷⁾。小野臣の勢力拡大の過程で、山城への進出も図られたとみることもできるのではないのでしょうか。

ところで小野氏の本拠が滋賀郡北部の小野村であるとしても、在地での動向を示す資料は全くありません。そこで考古資料、古墳や古代寺院のあり方を少しみておきたいと思います。図4をご覧ください。琵琶湖大橋の架かっている西が、堅田平野ですが、その少し上に和邇とう地名が見えます。その北を和邇川が西から東に流れています。和邇川の右岸の山手に現在、小野神社と道風神社がありまして、その近くにいくつか古墳がございます。これらの古墳は発掘していないので年代がはっきりしていませんが、一番大きな古墳でも、全長34mほどの小さな前方後円墳です。5世紀後半以降の築造とみられます。ですから、これらが小野氏に関わるものとするなら、古くからそれほど大きな勢力を持っていたと

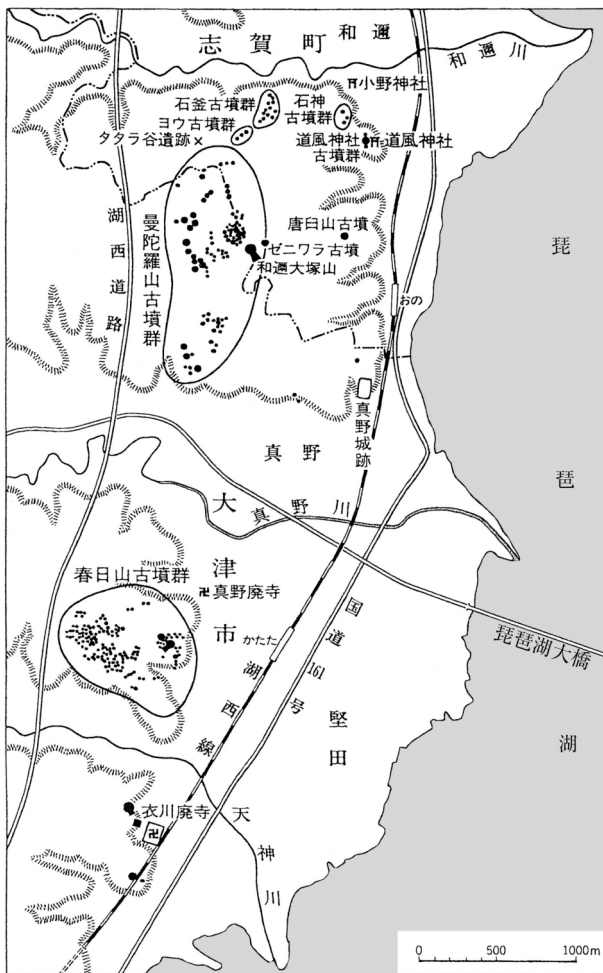


図4 滋賀郡北部の古墳と古墳群（『志賀町史』第1巻より）

は考えられなくなりますが、それは少し置いておきまして、この地域の有力な古墳（首長墓）はいったいどこに在るかということになります。先の図を見ますと、堅田平野の真ん中を真野川が西から東に流れており、湖西地域では高島平野に次ぐ大きな平野がその流域に広がっています。そしてこの真野川の北と南の山地に、それぞれ大規模な古墳群があります。

真野川左岸の曼陀羅山には、総数117基にのぼる曼陀羅山古墳群があります。その最高所には和邇大塚山古墳という大きな前方後円墳があります。大きいと言いましても全長72mですが、埋葬施設から鏡・玉など多くの副葬品が出ておりまして、4世紀の終わり頃の有力な古墳であると考えられています。そのうち和邇大塚山古墳に後続する古い古墳は数基だけで、ほとんどが5世紀末から6世紀の群集墳と言われるものです。いっぽう真野川右岸の春日山にも、春日山古墳群という大古墳群があります。春日山古墳群の場合も、198基の古墳が見つかっており、その中で最古最大のものが春日山古墳という前方後円墳で、全長60mほどの古墳です。発掘はしていませんので、築造年代ははっきりしませんが、おそらく5世紀の前半頃とみられています。春日山古墳の廻りには、数基の後続する古墳が築造されていますが、他の古墳はすべて5世紀末から6世紀の群集墳と言われるものです。

そして、和邇大塚山古墳の近くに、唐臼山古墳があります。ここからは、横口式石槨という飛鳥時代の貴族の墓として採用される石室が見つかっております。7世紀前半頃のものと推定されておりまして、これが今のところ小野妹子の墓として、一番有力な古墳とされておりまして、これが曼陀羅山古墳群の少し琵琶湖寄りの山麓に造られているということになります。それからこの地の豪族が建立した古代寺院もいくつか知られています。真野川右岸の春日山古墳群の東、琵琶湖よりの山麓に、真野廃寺が、さらに南に衣川廃寺がございます、詳しくふれる余裕はありませんが、特に衣川廃寺は、穴太廃寺の前身寺院と同じように、飛鳥時代の終わりの頃に建てられた、滋賀県で一番古いお寺でございます。小野妹子に関わる可能性も考えられると思います。

この地域の古墳文化をざっと見ましたが、ここから小野氏との関わりを云々することはできませんが、春日山古墳群と曼陀羅山古墳群の首長墓は、おそらく小野氏とは直接関わらないだろうと、詳しくお話できませんが、ワニ氏の同族であります近淡海国造、和邇部臣と関わるのではないかと考えております。そのように考えますと、小野氏は、小野の古墳群からも想定されるように、5世紀の段階では、いまだ和邇部臣に従属していた可能性が高く、在地での勢力を伸ばしたのは、6世紀後半以降、妹子が中央に出仕して、登用されて以降ではないかと、考えてもいいのではないかと思います。

2 犬上御田鍬とその一族

〈史料Ⅱ〉

『旧唐書』倭国伝 貞観五年条

貞観五年、使を遣わして方物を獻ず。太宗其の道の遠きを^{あわ}矜れみ、所司に敕して歳ごとに貢せしむる無し。又た新州の刺史高表仁を遣わし、節を持して往いて之を撫せしむ。表仁綏遠の才無く、王子と禮を争ひ、朝命を宣べずして還る。

『日本書紀』推古天皇二十二年六月十三日条

みなづき ひのとう ついたちつちのとうのひ いぬかみの き み みた すき やたべのみやつこ な もろこし つかは
六月の丁卯の朔 己 卯 に、犬上君 御田 鉏・矢田部 造 名を聞せり。を大唐に遣す。

『日本書紀』推古天皇二十三年九月条

二十三年の秋九月に、犬上君御田鉏・矢田部造、大唐より至る。百済の使、則ち犬上君に
したが まうけ
従ひて、来朝り。

『日本書紀』舒明天皇二年八月五日条

あき は つき みづのとみ ついたちひのとのとりひ だいにいぬかみのきみみたすき くすし め にち もろこし つかは
秋八月の癸 巳 の朔 丁 酉に、大仁犬上君三田耜・大仁薬師恵日を以て、大唐に遣す。
かのえねのひ まらうと みかど あへ
庚 子 に、高麗・百済の客に朝に饗たまふ。

『日本書紀』舒明天皇四年八月条

四年の秋八月に、大唐、高表仁を遣して、三田耜を送らしむ。共に対馬に泊れり。是の時
ものならふほしりやうん そうみん すぐりのとりかひ しらぎ おくるつかひら とも
に、学問僧 曇雲・僧旻及び勝鳥養、新羅の送使等、徒たり。

『日本書紀』景行天皇五十一年八月四日条

はじめ、日本武尊、ふたらのいりびめのひめみこ め みめ いなよりわけのみこ う たらしなかつひこのすめらみこと
初め、日本武尊、両道入姫皇女を娶して妃として、稻依別王を生めり。次に足 仲彦天皇。
ぬのしりびめのみこと わかたけのみこ いろえ これいぬかみのきみ たけるべのきみ すべ ふた やから はじめのおや
次に布忍入姫命。次に稚武王。其の兄稻依別王は、是犬上君・武部君、凡て二つの族の始祖
なり。

『日本書紀』孝德天皇即位前紀条

かるのみこ い な え たかめくら のぼ あまつひつぎしろしめ ととき おおとものながとこ あざな うまかひ のむらじ
輕皇子、固辞ぶることを得ずして、壇 に升りて即 祚す。時に、大伴長徳 字は馬飼。連、
こかね ゆき お たかみくら みぎ た いぬかみのたけべのきみ ひだり つかさつかさ
金の鞆を帯びて、壇 の右に立つ。犬上健部君、金の鞆を帯びて、壇の左に立つ。百官の
おみ むらじ くのにみやつこ とものみやつこ もあまりやそとものを つらな かさな をが
臣・連・国 造・伴 造・百八十部、羅列りて匝りて拝みたてまつる。

それでは、時間ありませんので、次に犬上御田鉏についてお話したいと思います。犬上御田鉏に関わる記録は、遣隋使の記事が最初です。『日本書紀』推古天皇二十二年（614）六月十三日条と推古天皇二十三年（615）九月条には、これは中国の記録には出ておりませんが、6月に犬上御田鉏等を大唐（隋）に遣わし、翌年に帰ってきたということが簡単に書かれております。帰国時には百済の使節を伴っていたとあり、実際に犬上君が隋に行ったのかどうか、問題の残るところです。ちょうどこの時、隋が減びて唐が興るという微妙な時期に当たっており、途中で引き返した可能性も考えられます。

『日本書紀』舒明天皇二年（630）八月五日条は、第1回の遣唐使の記事でございます。これについては、『旧唐書』倭国伝貞観五年（630）条に中国側の記録も見えておりますが、大仁犬上御田鉏を大唐に遣わすとあります。御田鉏は大仁という冠位を持っております。妹子が隋に行った時には、大礼という冠位で冠位十二階の五番目だったのですが、御田鉏の冠位は3番目です。したがって、犬上御田鉏はここで突如登場してきますが、それ以前から大和政権の中で、すでに

高い地位を得ていたことは、確認できるのではないのでしょうか。『日本書紀』はこの後、舒明天皇四年（632）八月条・十月四日条・五年正月二十六日条に、御田鍬の帰国と、新州刺史高表仁の来日、そのもてなしと帰国の記事などがありますが、これも時間がございませんので、省略させていただきますと思います。

そこで、犬上君御田鍬がどのように隋や唐に使した背景ですが、やはり小野妹子と同じように、近江の古代豪族としての特徴というものがあるのではないかと、ということを見ていきたいと思います。まず犬上君の出自につきましては、『日本書紀』景行天皇五十一年八月四日条に、犬上君の始祖系譜が掲載されています。これによりますと、犬上君は日本武尊の子稲依別王の子孫とされております。「是犬上君・武部君、凡て二つの族の始祖なり」とあります。この始祖系譜から言える事は、日本武尊というのは、悲劇の皇族将軍と言われるように、大和政権の軍事的な活動との関わりを指摘されております。ご存知の通り上田正昭先生は、早く「武部」については日本武尊の名代・子代ですけれども、軍事的な部と考えておられます⁽⁸⁾。またこの始祖系譜に犬上君とともに見える武（建）部君は、宮殿の十二の門を守る「宮城十二門号氏族」の中に見えておりまして、天皇の親衛隊、軍事的な氏族と考えられています⁽⁹⁾。したがって犬上君も、この系譜によりますと、やはり軍事的な背景を持った氏族ではないかということが言えるのではないかと思います。

そのことを裏付けるのが、『日本書紀』神功皇后摂政元年二月条の記事でございます。これはご存知の神功皇后が朝鮮半島へ渡るという記事で、その帰途、筑紫で応神天皇を生んだ後、母と子がともに大和に戻ることが書かれ、その時、応神天皇の異母兄弟である麿坂王と忍熊王が皇位を奪おうと反乱を起こすという記事があります。この記事の中に、「犬上君の祖倉見別と吉師の祖五十狭茅宿禰と、共に麿坂王に隸きぬ」とあり、続けて「因りて将軍として東國の兵を興さしむ」と書かれています。この記事から犬上君の祖倉見別が、五十狭茅宿禰と共に、麿坂王・忍熊王側の将軍として重要な役割を果たしていることが判ります。この反乱は、麿坂王・忍熊王の敗北で終わるのですが、五十狭茅宿禰はこの後も、瀬田川で殺されるという記事があります。ところが、倉見別に関しましては、その後登場することなく、結末もわからないのです。敢えて省略された可能性も考えられるのではないかと考えています。この記事からいえることは、伝承であって史実ではないとしても、犬上君が軍事的な役割りを、朝廷において担っていたことを示すものであることでしょう。

犬上君の軍事的な性格を示すものとして、注目されるのが『日本書紀』孝德天皇即位前紀（645）条でございます。これは軽皇子、孝德天皇が即位する時の即位儀の次第を述べたものでありますが、「軽皇子、固辭ぶること得ずして、壇に升りて即す。時に、大伴長徳連、金の鞆を帯びて、壇の右に立つ。犬上健部君、金の鞆を帯びて、壇の左に立つ」とあります。ご存知の通り、大伴氏と言いますと、天皇（大王）の所謂親衛隊の長官と言いますか、軍事指揮官として著名ですが、即位儀という重要な場面で、壇の両側に鞆を持って立つという、後の左右近衛の大將のような位置を占めるのは、それにふさわしいあり方といえます。そこに大伴氏と並んで犬上君が立っているという事は、その軍事的な役割を示すものといえるでしょう。しかも、孝德朝において、犬上君が朝廷において重要な位置を占めているということは、犬上御田鍬が唐に使をして、大き

氏名	出典	年紀	出身・身分	官位	記事	その他
稲依別王	『日本書紀』	景行五十一年・八・四	景行皇子		犬上君・建部君之始祖	
倉見別	『日本書紀』	神功元・三・五			犬上君之祖	
犬上君御田録	『日本書紀』	推古二十二・六・十三	遣隋使・遣唐使			六一四
犬上建部君	『日本書紀』	孝徳即位前紀・六・十四			即位式において金匱を帯びて壇の左に立つ	六四五
犬上君白麻呂	『日本書紀』	斉明二・九	遣高麗大判官			六五六
犬上君（欠名）	『日本書紀』	天智二・五・一			兵事を高麗に告げ帰国	六六三
犬上朝臣	『日本書紀』	天武十三・十一・一			朝臣を賜姓	六八四
犬上朝臣都比女	『正倉院文書』	天平感宝元・六・十	左京六条一坊真人戸口		「左京職移」	六四九
犬上朝臣真人	『正倉院文書』	天平感宝元・六・十	左京六条一坊戸主		「左京職移」	六四九
犬上朝臣（欠名）	『正倉院文書』	宝亀九・四・十九			「徳積真乘女東大寺功德分家地雑物寄進解」に連署	七五七
犬上朝臣望成	『日本後紀』	延暦二十四・六・十九		外従五位下		八〇五
犬上春吉	『日本三代実録』	仁和元・七・二十八	近江国検非違使主典	従七位上	前犬上郡大領	八八五
羽栗臣国足	『正倉院文書』	天平十八・四・二十五	近江国犬上郡尼子郷戸口		「写経所解」	七四六
羽栗臣伊賀万呂	『正倉院文書』	天平十八・四・二十五	近江国犬上郡尼子郷戸主		「写経所解」	七四六
川瀬舍人高市	『正倉院文書』	天平十七・九・二十三	近江国犬上郡河原郷戸主		「仕丁送文」	七四五
川背舍人高市	「平城京長屋王家木簡」		犬上郡瓦里		荷札（『平城宮発掘調査出土木簡概報』19）	八世紀
川背舍人乙	「平城京長屋王家木簡」		犬上郡瓦原郷		荷札（『平城宮発掘調査出土木簡概報』19）	八世紀
口瀬舍人立人	『正倉院文書』	天平十七・九・二十三	近江国犬上郡河原郷戸主高市の孫		「仕丁送文」	七四五
川上舍人名雄	『日本三代実録』	貞観四・七・二十八	近江国犬上郡人	正六位上	左馬大属	八六二
蛸江連知万呂	「平城京長屋王家木簡」		近江国犬上郡瓦里人		荷札（『平城宮発掘調査出土木簡概報』19）	八世紀
前子位	「平城京長屋王家木簡」		犬上郡甲里		荷札（『平城宮発掘調査出土木簡概報』19）	八世紀
子部伊知	「平城京長屋王家木簡」		犬上郡甲里		荷札（『平城宮発掘調査出土木簡概報』19）	八世紀
生部石麻呂	「平城京長屋王家木簡」		犬上郡瓦里		荷札（『平城宮発掘調査出土木簡概報』19）	八世紀
物部福万呂	『正倉院文書』	天平勝宝九・四・七	近江国犬上郡火田郷戸主		「西南角領解」	七五七
建部千万呂	『正倉院文書』	天平勝宝九・四・七	近江国犬上郡火田郷戸口		里人画師（「西南角領解」）	七五七
實秦大嶋	『正倉院文書』	天平勝宝九・四・七	近江国犬上郡火田郷戸主		「西南角領解」	七五七
實秦恵師千嶋（大嶋）	『正倉院文書』	天平勝宝九・四・七	近江国犬上郡斐田郷戸主		「画工司未選申送解案帳」	七五七
實秦恵師道足	『正倉院文書』	天平勝宝九・四・七	近江国犬上郡斐田郷戸口		画師司画師（「画工司未選申送解案帳」）	七五七
實秦画師豊次	『正倉院文書』	天平宝字二・二・二十四	近江国犬上郡人		画工司画師（画工司移）	七五七
實秦君万呂	『正倉院文書』	天平宝字二・二・二十四	近江国犬上郡人		画工司画師（画工司移）	七五八
橘守金弓	『正倉院文書』	天平宝字六・八・二十七	近江国犬上郡人	少初位上	造東大寺司審主（甲賀山作所領）	七六一
飽波男成	『正倉院文書』	宝亀二・三・十七	近江国犬上郡沼波郷戸主		「凡海連豊成経師貢進文」	七七一
飽波飯成	『正倉院文書』	宝亀二・三・十七	近江国犬上郡沼波郷戸口		「凡海連豊成経師貢進文」	七七一
春良宿禰諸世	『日本三代実録』	貞観六・八・八	近江国犬上郡人	正七位下	左近衛府	八六四
穴太村主志豆加比亮	『正倉院文書』	宝亀九・四・十九	（某郡某郷 犬上郡）		「徳積真乘女東大寺功德分家地雑物寄進解」	七五七
穴太日佐広万呂	『正倉院文書』	宝亀九・四・十九	（某郡某郷 犬上郡）		「徳積真乘女東大寺功德分家地雑物寄進解」	七五七
穴太日佐広継	『正倉院文書』	宝亀九・四・十九	（某郡某郷 犬上郡）		「徳積真乘女東大寺功德分家地雑物寄進解」	七五七
錦村主三田	『正倉院文書』	宝亀九・四・十九	郷長（某郡某郷 犬上郡）		「徳積真乘女東大寺功德分家地雑物寄進解」	七五七
錦村主特万呂	『正倉院文書』	宝亀九・四・十九	（某郡某郷 犬上郡）		「徳積真乘女東大寺功德分家地雑物寄進解」	七五七
錦村主田主	『正倉院文書』	宝亀九・四・十九	（某郡某郷 犬上郡）		「徳積真乘女東大寺功德分家地雑物寄進解」	七五七
錦部	『正倉院文書』	宝亀九・四・十九	（某郡某郷 犬上郡）		「徳積真乘女東大寺功德分家地雑物寄進解」	七五七
徳積真乘女	『正倉院文書』	宝亀九・四・十九	（某郡某郷 犬上郡）		「徳積真乘女東大寺功德分家地雑物寄進解」	七五七
徳積小東人	『正倉院文書』	宝亀九・四・十九	（某郡某郷 犬上郡）		「徳積真乘女東大寺功德分家地雑物寄進解」	七五七
徳積蒲原	『正倉院文書』	宝亀九・四・十九	（某郡某郷 犬上郡）		「徳積真乘女東大寺功德分家地雑物寄進解」	七五七
寶火夏	『正倉院文書』	宝亀九・四・十九	（某郡某郷 犬上郡）		「徳積真乘女東大寺功德分家地雑物寄進解」	七五七
神人氏岳	『日本三代実録』	仁和元・七・十九	犬上郡郡老	少初位下	権医師	八八五

図5 犬上郡の古代人名

な功績を挙げたことと関わって、その後も中央で有力な地位にあったことを示しているといえます。

そこで犬上君のふるさとということになりますが、図5は古代の文献、主に九世紀以前の文献資料で、犬上郡に居住が確認されるか、居住民と関わりのある人名を一覧にしたものです。上からずっと犬上君に関わるものをあげておりますが、その一番下のところに犬上春吉という人が見えます。先程お話ししましたように、前犬上郡大領として、唯一記録に残っている人物です。そして、犬上君の中央における活躍を考えますと、やはり犬上郡において一番有力であったのは、後の郡領氏族である犬上君であることは、まず間違いないと考えます。

その次に、いくつか在来系の人々の名前が見えます。特に川瀬（背）舎人とか、川上舎人のように、舎人を称する人が見えるのは、注目されますが、それは置いておきまして、その下、少し飛びまして、箕秦恵（画）師というのが見えます。これは画工司の画師で、いわば朝廷直属の絵描きです。箕秦恵師が何人か見えますが、その多くが犬上郡火田（斐田）郷に居住する人です。犬上郡の秦系の人が絵を描くのかということは非常に面白い点でございますが、実は朝廷の画工司に所属する画師の多くが、秦氏系の人々なのです⁽¹⁰⁾。そしてこの犬上郡の北隣が、息長氏の本拠である坂田郡になります。坂田郡で一番犬上郡に近いところに、丹生という水銀朱の採れる谷がございまして、その地域に居住する息長氏の一族、息長丹生真人氏も画工司に画師を出す家なのです。ですから、この丹生谷を挟んで、犬上郡には箕秦画師、坂田郡には息長丹生真人という、朝廷の画工司に画師を輩出した一族が居住しており、おそらく地元でも交流があったであろうと思っております。

〈史料Ⅲ〉穂積眞乗賣東大寺功德分家地雜物寄進解（『大日本古文書』巻6 - 599・600頁）

穴太村主志豆加比賣女子眞乗賣解 申進功德分家地并雜物事

合地二處 之中 構屋一間 釜一口功德分田者
十三條八里有地放主所進入者

右件家地并雜物等、於東大寺所進如件、仍録事狀、以解、

寶龜九年四月十九日

女子穂積眞乗女

男穂積小東人

錦部

錦村主 特万呂

穴太日佐廣万呂

穴太日佐廣 継

穂積 蒲 麿

錦村主 田 主

犬上朝臣

郷長錦村主 三 田

寶 火 夏

その下あたりに飽波男成が見えます。このあたりから漢人村主、倭漢氏配下の一族です。飽波村主も見えますが、その次から穴太村主など多くの漢人村主が見えます。これらは『正倉院文書』に収録される宝亀九年（757）四月十九日付の「穂積眞乗賣東大寺功德分家地雑物寄進解」という文書に見える人々です。この文書は、所在地についての記載がなく、犬上郡のものかどうかは、確定できません。そこにみえる寄進状の保証人としてみえる人名の多くが、「郷長錦村主」をはじめ、いわゆる志賀漢人と見られる人々で、最後に「犬上朝臣」が見えます。このことから犬上氏がここで見えるということは、やはりこの史料が犬上郡に関わるものであると私は考えております。その場合に、郷長が錦村主ということですので、この郷は志賀漢人が犬上郡に進出した拠点ではないかと想定しております。

ご存知のように、滋賀県の野洲市、旧中主町から、古い木簡が多く出土しております。その中に重要な木簡があります。西河原森ノ内2号木簡で、天武朝の木簡です。その内容は、野洲郡の郡役所と考えられている西河原森ノ内遺跡から、舟で「衣知評平留五十戸」（後の愛智郡平留郷）に置いてある米を取ってくるよう命じたものです。西河原森ノ内1号木簡などにより、この遺跡周辺（野洲郡馬道郷）には、志賀漢人がまとまって居住することが判っておりまして、衣知評平留五十戸の米を保管していた但波博士（大友但波史）も志賀漢人の一族です。衣知評平留五十戸という場所は、ちょうど犬上郡と愛智郡の境目あたりの湖辺にあたり、奈良時代には覇流荘という東大寺領の荘園があったことでも良く知られています⁽¹¹⁾。

ですから、この木簡は、志賀漢人の一族が、琵琶湖湖辺の各地に進出し、湖上交通を使って物流に携わっていた有力な証拠となるものですけれども、図2に示しました志賀漢人の各地における居住地も、その大半が琵琶湖の港ある場所の近くであることも確認されています。そして各地に進出した志賀漢人の中には、坂田郡穴太村主の場合のように、平安時代の初めに郡大領になるなど、勢力を拡大しております。

こうしたことから、先の文書に見える某郷が犬上郡の湖辺にあったのではないかと見ておりましたが、今回、この文書を見なおしておりまして、見逃していたといいますか、検討を怠っていたことに気がきました。それは穴太村主志豆加比売の娘穂積眞乗女が寄進した「功德分田」の所在地で、おそらく某郷にあったと考えられるからです。水田の所在は「十三条十八里」と書いてありますので、これを犬上郡の復元条里に当てはめてみますと、先ほどお話ししました衣知評平留五十戸の北あたり、犬上郡と愛智郡の境の湖辺に推定されます（図6）。

これによって、何が言えるかと言いますと、当然私がこれまで主張しておりました、志賀漢人が湖辺に拠点を持っていたということが裏付けられたことが一つ。もう一つは、犬上君（朝臣）がこの某郷に住んでいるということは、犬上氏の本拠が、某郷など琵琶湖に近い所にあった可能性が高くなったということです。

ところでこのことと関連しまして、近年の発掘調査により、湖辺における新しい考古学的な事実が明らかになりました。まず平成13年に、湖岸の独立丘陵である荒神山山頂におきまして、墳長114mをはかる、県下第3位の前方後円墳荒神山古墳が発見されました。墳丘に廻らされた埴輪の年代から、県内最古級の4世紀後半に築造されたことが明らかになりました⁽¹²⁾。埋葬施設につきましては、後円部頂の中央部に大きな盗掘坑がありますが、石材などは見つかっておらず、

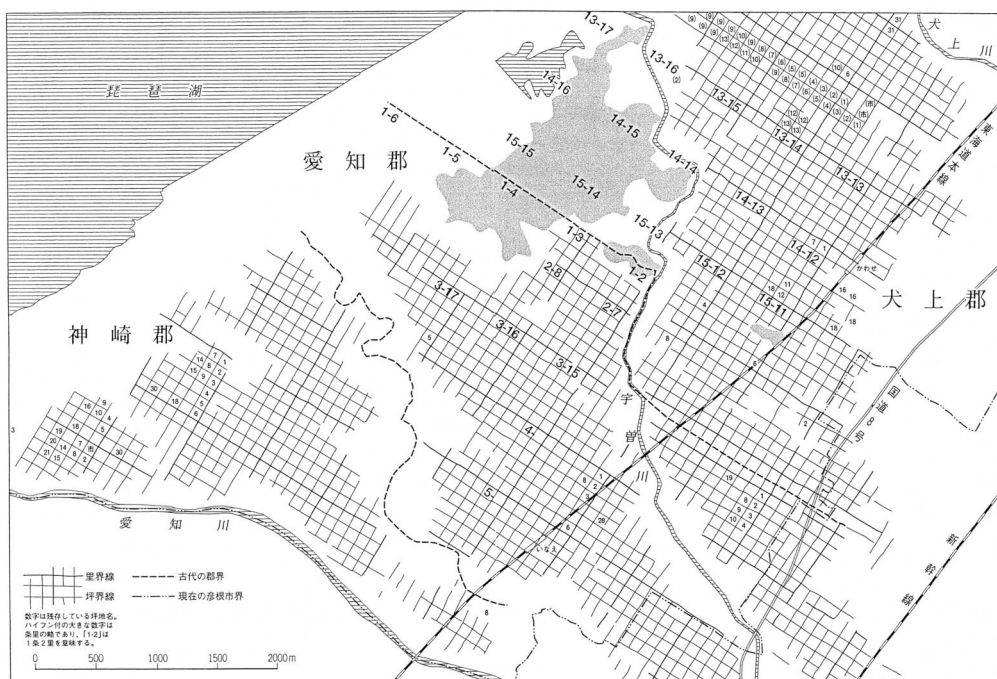
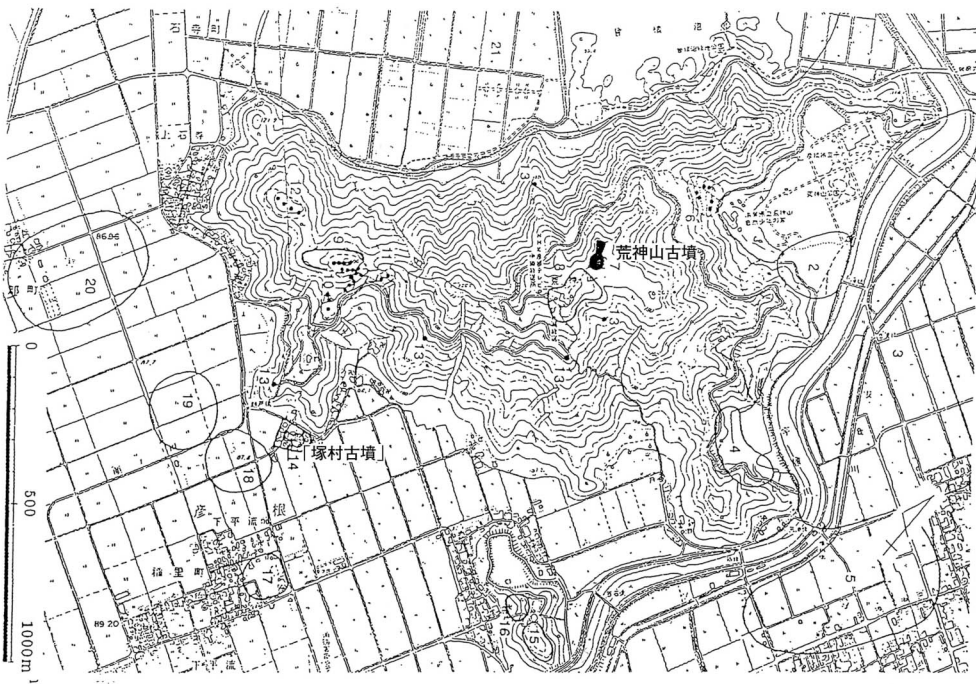


図6 犬上郡条里復元図（『新修彦根市史』第1巻 通史編 古代・中世より）

粘土郭の可能性が考えられています。また副葬品についても手がかりはありませんが、麓の延寿寺に荒神山出土とされる車輪石残片が伝えられておりまして、年代的にも荒神山古墳の唯一の副葬品であったとみられます（図7）。

また、すでに墳丘は失われ、発掘調査もされていませんが、荒神山の南麓、稲枝町大字塚村の明治時代の地籍図の分析から、全長100m強で、150mの馬蹄形の周濠が廻る前方後円墳の存在が復原されております（「塚村古墳」⁽¹³⁾）。この古墳については、今後の調査がさらに必要ですが、湖辺に前期・中期にさかのぼる巨大な首長墓の存在が明らかになりつつあると言っても差し支えないと思います。なお、これも一部の調査で、詳細は明らかではありませんが、「塚村古墳」の南1.5kmの普光寺町地先の発掘調査で、大量の円筒埴輪とともに、鶏形・蓋形・馬形・人形などの形象埴輪が出土しています（「ゲボウ山古墳」）。規模ははっきりしませんが、後期初頭のかかなりの規模もつ首長墓の存在が推定されます⁽¹⁴⁾。こうした事実は、犬上郡の有力豪族犬上君の本拠が、湖辺にあったとみられることと関連して、大いに注目されることです。

このことを間接的に裏付けますが、犬上郡東部、犬上川左岸扇状地の古墳文化の様相です。ここ10年余りの間に、ほ場整備という水田の区画を造りなおす工事が、犬上郡東部でも行なわれてきて、そこから、多くの古墳が見つかりました。10km²ほどの範囲に、古墳時代後期の古墳が百数十基確認されておりまして、盛土を削平され水田の下に眠っている古墳を含めると、優に300基を越える古墳が造られていたとみられます。実は発見された古墳の多くは、半地下式に石室を造って、その上に盛り土をしたもので、階段で下へ降りていくという古墳ですから、盛土を削平されても石室の一部が地下に残っているのです。こうした古墳は愛智郡で多く見られるもの



荒神山古墳位置図



荒神山古墳測量図

図7 荒神山古墳と「塚村古墳」(註(12) 「彦根市荒神山古墳測量調査報告」より)

で、600基とか700基の古墳が見つかっています。したがって、これらの古墳は、当然依知秦氏との関わりで、考えられておりますが、このことから犬上郡東部、犬上川右岸扇状地の開発が、6世紀以降、おそらく箕秦画師など秦氏系の渡来人たちによってすすめられたことを示していると

いえるでしょう。そしてこういった点から見て、犬上氏の基盤が、当初やはり琵琶湖に近い地域にあったということが、ここから逆に言えるのではないかと思います。

おわりに

以上、近江の古代豪族小野氏と犬上氏が、初期の遣隋使・遣唐使に登用された事情と背景について、私なりの考えをお話いたしました。最後に余談となりますが、小野・犬上両氏のちょっとした繋がりについて、お話しさせていただきたいと思います。先の図5に犬上郡の居住者として見えています羽栗臣氏は、葉栗臣とも表記され、『古事記』孝昭天皇段のワニ氏同祖系譜にその名が見えます。また『新撰姓氏録』左京皇別下に、「和安部朝臣。彦姥津命の三世の孫、建穴命の後なり」とありますように、ワニ氏一族の有力豪族です。そして『新撰姓氏録』山城国皇別に「葉栗」がありまして、「小野と同じき祖。彦国葺命の後なり」とありますように、小野臣氏の同族とされています。また、尾張国にも葉栗郡・葉栗郷がありまして、山城国久世郡にも羽栗郷がありますから、こうした地域にも一族ないし配下が居住していたと思われます。そうした中で、山城国の乙訓郡に居住する葉栗臣氏は注目されます。すなわち『類聚国史』百八十七仏道部十四によりますと、乙訓郡人羽栗臣翼の父吉麻呂が、霊龜二年（716）、学生阿倍仲麻呂の「兼人」として入唐し、唐においてその地の女性と結婚、翼・翔の2男をもうけ、天平六年（734）共に帰国したことが書かれています。そして、兄の翼は後に遣唐判官、内葉正、侍医などとして活躍し、弟の翔も、使節として唐に渡りますが、そのまま帰国せず、後に円仁の在唐時に、それに従ったとされています⁽¹⁵⁾。小野氏の同族で、犬上郡にも居住が確認されます葉栗臣の一族が、対外交渉に深く関わっておりますのは、小野臣氏と犬上君氏が、近江においても、何らかのつながりを持っていたことを窺わせ、興味深いものがあります。

註

- (1) 山尾幸久『古代の日朝関係』（塙書房 1989）、坂元義種「聖徳太子とその外交」（『歴史公論』5 - 11 1979）
- (2) 坂本太郎『聖徳太子』（吉川弘文館 1979）、菊池克美「妹子の『国書紛失』事件」（『続日本紀研究』第226号 1983）
- (3) 大橋信弥「息長氏と渡来文化」（『古代豪族と渡来人』吉川弘文館 1004）
- (4) 大橋信弥「近江における渡来氏族の研究—志賀漢人を中心に—」（『古代豪族と渡来人』前掲）
- (5) 岸俊男「ワニ氏に関する基礎的考察」（『日本古代政治史研究』塙書房 1966）
- (6) 山尾幸久「遣隋使のふるさと」（『史跡でつづる古代の近江』法律文化社 1979）、同「小野氏と小野妹子」（『遣隋使 小野妹子』志賀町 1994）
- (7) 岡田精司「古代の小野社と小野神社」（『翔古論聚』1993）
- (8) 上田正昭『日本武尊』（吉川弘文館 1958）
- (9) 佐伯有清「宮城十二門号についての研究」（『日本古代の政治と社会』吉川弘文館 1970）
- (10) 平野邦雄「秦氏の研究」（『史学雑誌』七〇巻三・四号 1961）
- (11) 山尾幸久「森ノ内遺跡出土の木簡をめぐって」（『木簡研究』12号 1990）
- (12) 高橋美久二「前方後円墳の時代—荒神山古墳の発見をめぐって—」（大橋信弥・小笠原好彦編『新・史跡で

- つづる古代の近江』 ミネルヴァ書房 2005)、『荒神山古墳—平成十五・十六年度範囲確認調査概要—』
(彦根市教育委員会 2005)、早川 圭・増田洋平「彦根市荒神山古墳測量調査報告」(高橋美久二編『近江
の考古と地理』 滋賀県立大学人間文化学部考古学研究室 2006)
- (13) 高橋美久二「前方後円墳の時代—荒神山古墳の発見をめぐって—」(前掲)
- (14) 細川修平「扇状地の開発と古墳」(滋賀県立安土城考古博物館第31回企画展図録『扇状地の考古学—愛知・
犬上の古代文化—』 滋賀県立安土城考古博物館 2006)
- (15) 角田文衛「葉栗臣翼の生涯 (一)・(二)」(『古代文化』第9巻第2号・第3号 1962)、王勇『唐から見た
遣唐使』(講談社 1998)